後　記

賀川俊彦教授は平成七年三月、定年をもって慶應義塾を退職された。昭和三十年四月に法学部に助手として奉職されていらい、在職実に四十年の長きにわたる。

私が初めて賀川先生に接したのは、大学四年になった昭和三十一年四月のことであった。当時の政治学科は必修科目が多かったが、そのなかに「研究指導」という科目名のクラス単位の英書講読の授業が、三年・四年各二コマあった。担当者は三・四年持ち上がりで、我々のクラスは一つが清岡暎一先生、もう一つが当時若手教授であった石川忠雄先生（前塾長）の担当であった。ところが我々が四年になるとき、石川先生が米国に留学されることになったため、当時まだ助手二年目であった賀川先生が急遽後任の担当者に起用されたのであった。

我々のクラスに賀川先生より年上の学生がいたかどうかは、級友の年齢を正確に記憶していないので分からないが、ほぼ同年齢の者が二、三人いたことは確かであった。あのころは、学制改革に伴う混乱や、結核などの病気のために、何年も遅れて新制大学に入学する者は、そう珍しくはなかった。我々のクラスにも旧制高校一年修了・中退者（学制改革の影響でそうなった）で、かつ結核療養のために遅れて慶應に入学した友人や、早稲田をやめて慶應に入学しなおした友人などがいた。

賀川先生は、これら同年配ないし年の近い学生を、突然教えなければならなくなって、おそらく不安であったと思うが、そんな気配は見せず、なかなか堂々とした授業ぶりであった。いつの時代もそうなのだが、学生は若い先生の、その若さを好ましく思い、身近に感じるものである。賀川先生の場合もそうであって、我々のクラスメートのなかには、教室外で先生と親しく交流し、人生相談などを持ちかけた者が少なからずいたようである。当時の政治学科でもっとも若い賀川先生に出会うことができた我々のクラスは、幸運だったのである。

ところで、賀川先生は日本におけるラテンアメリカ政治研究の草分けであって、昭和三十年代後半にラテンアメリカ政経学会が設立されたときには、その理事に選ばれ、学会発展のために大いに貢献された。私自身はアフリカ現代政治が専門であるが、それでもラテンアメリカ問題に少なからず興味を持ち続けているのは、かつて賀川先生に教えを受けたことの影響でもあろう。私が、地域研究センターの所長を務めていた当時、「アフリカ・ラテンアメリカ関係史」の共同研究プロジェクトを組織し、その成果を『アフリカ・ラテンアメリカ関係の史的展開』（矢内原勝・小田英郎共編・平凡社・一九八九年）として公刊したが、このときには賀川先生も研究会に参加され、久しぶりにそのご意見を聞くことができたのは、楽しい思い出である。

賀川先生は、義塾退職後も、しばらくは非常勤講師として「現代ラテンアメリカ論」の講義を担当される。三田キャンパスで先生の温顔に接する機会が失われたわけではないので、我々後進の淋しさもいくらかはまぎれようというものである。

平成七年十月

法学部教授　小田英郎